

東京薬科大学新聞

発行所 東京薬科大学新聞会
責任者 隈崎修孝

号外

石戸良治先生・糸川秀治先生

御退職インタビュー

今春、東薬から石戸良治先生と糸川秀治先生が退職される。そこで今回は、お二人にお話を伺うことにした。
なお、先生方の最終講義が

以下の通りに開講される。お世話になった人はぜひ出席してほしい。
日時 三月七日(土)
場所 一一一講義室

第一薬化学教室

石戸良治先生

第一薬科学教室の石戸良治先生は、本学を卒業後、小川茂先生と故太田達夫先生のお世話があり、直ちに東工大研究生として進まれた。東工大大学院理工学研究科博士課程化学専攻修了(理学博士・昭和三八年三月)後、東工大理学部化学科助手から助教を経て教授(昭和五七年一月)に就任された。平成元年九月に本学薬学部へ赴任して来られ、平成六年度から二年間、初代薬学部長も務められた。また、先生の炭酸エステルを

用いる合成研究が基になって *Hydroxy Yellows*、*Hydroxy* の特効薬アラセナAが開発されたり、抗エイズ薬AZTやD4Tの原料である *Hydroxyurea* の工業的製造法の確立に尽力されるなど、社会への貢献も大きい。
まず、御退職にあたり現在の心境を伺った。
「東工大では定年が六十歳であったが、本学に戻らせていただいたおかげで六五歳まで研究を続けることができた。本学は『申し分のない』とい

う表現がそのままではまるような教育・研究環境にあった。その上、文部省から科学研究費を、科学技術庁からは科学研究振興調整費をいただいたことができ、恵まれた研究費の中で精一杯教育と研究に励む事ができた。このような大変な好運に恵まれて、平成元年からの八年六カ月を過ごす事ができ心から感謝している。

退職するにあたって、この東京薬科大学が薬学部と生命科学部の円滑な協力体制の下に、益々発展されるよう心からお祈り申し上げたい」
先生が研究職を選ばれたきっかけを話していただいた。「本学薬学部の三年次に在学中、宮崎元学長や森現学長の恩師にあたる故太田達夫先生から『植物成分の化学』(刈米達夫著、南山堂)を基にした講義を伺うことができた。大学院進学を前にして、東工大理学部化学系佐藤徹雄先生の「君はヌクレオシドを造りたまえ」という指示とこの教科書の一節が、研究課題の発想の源となった。有り難いことにその他の先生方からも貴重な教えを戴くことができた。私ばかりではなく、人との出会いが人生の転機とな

ったと、伺うことが非常に多い。学生の皆さんにも是非このような体験をして欲しい」
最終講義の内容について、少しだけ教えていただいた。「私の学生時代から今日にいたるまで、素晴らしい御指導を賜った先生方のお話と本学における研究歴史を中心とした内容に致したい」
最後に、学生に一言お願いした。

「薬学部学生の大部分は大変よく学びよく遊ぶタイプで、その将来に期待する処が大である。二十一世紀に薬学者・薬剤師が担う役割の重さを自覚し、基礎薬学に力点を置いて勉学に励んで欲しい。特に無機・有機化学は薬学を理解する上での根本であるのだから、必ず習得して欲しい」
病院薬剤師を目指す学生がかなり増えてきているが、医師・看護婦が求める薬剤師像をあなた自身の手で模索していただきたい。
大学院への進学を考えている学生も多いと思う。院生や共同研究者の思いも寄らぬ実験結果への遭遇や素晴らしい発想が私達の研究に与えた影響は計り知れない。本学の優れた研究水準は、このような人達の優れた能力によって維

持されているのである。「我こそは」と思う学生の大学院進学を大いに勧めたい。

最近、勉学に臨んで不遜な態度をとる学生が目にあふる。少なくとも講義を聴いた上でシラバスの内容を念頭に置いた復習をするぐらいの姿勢を学生に求めたい。大学で教わったことは何も役に立たないなどという無責任な発言を卒業生から聞くことがあるが、これは大きな誤りである。薬学部で学んだからこそ、薬剤師国家試験に合格できたのである。社会人になってからはそれぞれの職域に応じた勉強を生涯続けることは当然である。今学んでいる学問が、どの関連分野でも必要とされる基礎である事を忘れないで欲しい。

また、これは学問以前の問題であるが、守るべき規範を守れなかったり、公共物品・施設の使用の仕方がひどい学生を最近多く見かける。学生自身が良識を持って行動されることを期待したい。

確かに世の中は色々乱れ矛盾した事が多いが、ここは大学である。皆で、信念、自信と希望を持ち、明るい社会を築かれるよう努力されん事を期待している」

第一生薬学教室

系川秀治先生

第一生薬学教室教授である系川秀治先生と本学との関わりは、どのような御縁でいつ頃から始まったのだろうか。「私は、もともと本学の出身です。学生時代は、山岳部に所属していました。長野にある学外厚生施設の黒菱ヒュッテは、私が所属していた頃に山岳部が造りました。実はこの施設は、長野で開催される冬季オリンピックでのスキースタート地点から、たいへん近いところにあります。競技の合間にこの施設は見えるはずですよ。注意して見てもうえれば嬉しいですよ。本学卒業後、東京大学大学院に進学しました。大学院卒業と同時に、東京理科大学の薬学部に助教として着任しました。そこで五年間勤務した後、昭和四十年に本学へ異動してきましたのです。以来三十数年、本学で研究を続けてきました」

三十年以上も研究を続けるには、大変な苦勞があったことだろう。そこで、研究室運営にまつわる苦勞話を伺ってみたい。

「本学のような私立大学の場合、研究費を集めることは非常に大変な事なのです。やはり、研究費という裏付けなしに研究を進行させていくことは困難でしょう。そういう面では大変な苦勞をしてきました。また、研究テーマを面白くしないと、優秀な人材は集まってはきません。私の研究室で二十年以上続けている、抗腫瘍活性天然薬物の開発研究というテーマに引かれて、世界各国から留学生の応募が来ています。私はもう定年だというのに、未だに応募があるんです。いままで私の研究室にやって来た留学生には、様々な国籍の人がいます。中国、韓国、マレーシアのようなアジアだけではなく、カナダ、アメリカ、ヨーロッパ、エジプトなどからも来ています。研究室での日常会話には

英語を使っています。英語を話すことは、国際社会において最低限のルールであると言えるでしょう。欲を言わせてもらえば、英語を身につけたうえで、もう一ヶ国語が話せるようになって欲しいです。私は、学生には国際性を備えて欲しいと考えています。皆さんも語学をおろそかにせず、頑張ってください」

先生は、研究テーマである抗腫瘍活性天然薬物の開発研究について、次のように語ってくださいました。

「この研究では、植物から癌に効く物質を探し出し合成していきます。長年の研究の結果、中国産、日本産のアカネの根から、抗腫瘍活性物質として非常に有効な物質がとれたのです。しかし、同じアカネの根でもヨーロッパ産のものからは、この物質はまったく検出されませんでした。これが非常に興味深いというところで、さらに研究を続けていきます。私はこのアカネの研究にもっとも重点を置いているのですが、最近になって雑誌などから、ウコンについての取材を受けることが多くなってきたのです。一般の人にもウコンの薬効が広く知られるようになって、注目されるようになってきたのでした。」

うになってきたのでした。確かにウコンの研究もしていたのですが、これは数多くの研究テーマの一つです」

三月には最終講義が開講される予定である。そこでは、どのような講義をされる予定なのだろうか。

「他大学の最終講義では、たいてい自分の研究についての発表を行うので、講義の内容が高度になってしまいがちです。しかし、本学の場合は、学部の学生なども講義を聴きに來ます。そのため、研究についてだけではなく、一般の人にも楽しんでもらえる内容で講義をしたいと思っています。標本採集のために世界各地を旅行した経験などを話してみたいと考えています」

最後に学生に一言頂いた。「例えば、人に会ったら挨拶をする。こんな当然の事も、最近の学生は出来てないように思えます。私は、学生には学生らしく、きちんとした態度をとって欲しいのです。挨拶をきちんとする、授業に遅刻をしないなどは、最低のルールではないでしょうか。皆さんには、将来という夢と希望があるのです。やるべきことはきちんとやって、頑張ってください」